病室

——教室への伝言

徳永進

破綻する日常があり、輝く日常への思いがあり、回復があり悪化があり、生死があり死があり、嘘があり、過

太郎次郎社

病室

教室の伝言

徳永進

太郎次郎社

病室

教室への伝言

一九八九年十月十日初版印刷
一九九〇年一月二十日三版発行

◉

著者……徳永進
造本者……杉浦康平＋谷村彰彦
イラスト……竹本祥男
発行者……友兼清治
制作者……浅川満
発行所……株式会社 太郎次郎社
東京都文京区本郷五―三二―七　郵便番号一一三
電話〇三―八一五―〇六〇五　振替東京五―一二七八四五

印字……福田工芸株式会社〈本文〉＋プロスタディオ〈見出し類〉
印刷……株式会社平河工業社〈本文〉＋株式会社精興社〈装幀〉
製本……ナショナル製本協同組合
定価……カバーに表示してあります。

0036-5008-4456 ©Susumu Tokunaga 1989, Printed in Japan

目次

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

プロローグ
くやしいか　がっこう　くやしいか　びょういん……6

I……病室の一日……10

朝の回診……12
◉朝がはじまる◉ヒゲをそる◉スットントン節をうたう◉嫁にいくまでは……◉パチンコでもできたら◉負けりゃしませんで

散髪屋さん……22
◉街道筋◉古谷散髪屋◉手術◉衰弱◉二本の腕◉下顎呼吸◉さーみしげな顔

五月の午後……32
◉ようも殺さずに◉殺したらええがな◉死なせて◉死なれんで

はし……41
◉生活の橋◉検問ゲート◉回復の橋◉かけ橋

学校……55
◉田舎の小学校◉町の小学校◉中学校のこと◉高等学校のこと◉T君の学校

夜中の解剖……67
◉午前二時半◉真夜中の死◉肺線維症◉家庭酸素療法◉解剖依頼◉地下の解剖室◉霊安室◉死化粧◉静かな死◉午前六時四十分

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

II……臨床からの伝言……78

不良患者……80

◉八十歳の末期癌◉わたし、役に立ってますか?◉〝やくざ〟な患者◉〝不良患者〟が問うているもの

ひとりの息……93

◉最後の息◉息の歴史◉息を吹きこむ◉神様の息◉ひとりの息◉息を継ぐ

日常……103

◉立つことさえできない◉肌が暖かい◉目で聞き、耳で見る◉日々(にちにち)のこと◉輝く日常

正しさ……116

◉異常さがし◉正常値と異常値◉ホメオスターシス◉癌を告げるか◉癌を伝える◉きまった正しさはない

コンクリートのやさしさ……128

◉やさしさ◉プラットホーム◉ヌード劇場◉療養所◉手術室◉ラッキョ畑

Ⅲ……病室のことば……142

生命体……144
◉ミズブキ刈り◉ハレー彗星◉いくちゃんの死◉生命体の定義
いち……152
◉一歩◉一口◉一田◉一言◉ひとー
うそ……165
◉棟梁の嘘◉イソップ物語の嘘◉ことばと嘘◉嘘の名前◉癌と嘘◉医療者の嘘
死ぬ……175
◉不思議な生命◉夏の病棟◉人は死す
笑い……184
◉さまざまな笑い◉集中治療室での笑顔◉末期癌の人の笑い
距離……192
◉距離感◉いとこの距離◉隔離の距離◉ひの距離◉ケアの距離◉性の距離◉宇宙の距離
さばる……201
◉原風景◉学びの発見◉人間の発見◉自分の発見
あとがき……210

［プロローグ］くやしいか　がっこう　くやしいか　びょういん

一九八九年の四月に、ぼくは鳥取市にある久松山という小さな山のふもとに、セミナーハウスのような家を建てた。六月に谷川俊太郎さんが来て、その家のなかにある「五十人ホール」という名のホールで、自作の詩を朗読してくださった。長年詩を書き続けているので、人間がかかえる問題のほとんどが詩のなかにあった。神も宇宙も、空も海も、男も女も、結婚も離婚も、子供も大人も、老いも死も生もすべてあった。「何でもあるのね」と言われて、谷川さんが「ええ、ぼくは〈パルコ〉だから、何でもある」と答えると、みんなが笑った。『ことばあそびうた』や『わらべうた』や『よしなしうた』も朗読され、何度も笑い声がおこった。楽しい集まりだった。

★

その日に朗読された詩のなかで、ぼくが一番好きだったのは、『がっこう』だった。

がっこう

がっこうがもえている
きょうしつのまどから

どすぐろいけむりがふきだしている
つくえがもえている
こくばんがもえている
ぼくのかいたえがもえている
おんがくしつでぴあのがばくはつした
たいいくかんのゆかがはねあがった
こうていのてつぼうがくにゃりとまがった
がっこうがもえている
せんせいはだれもいない
せいとはみんなゆめをみている
おれんじいろのほのおのしたが
うれしそうにがっこうじゅうをなめまわす
からだをよじりゆっくりとたおれていく
ひのこがそらにまいあがる
くやしいか　がっこうよ　くやしいか　（谷川俊太郎詩集『はだか』から）

この詩の朗読のあと、「ぼくのほんとの気持ちなんです。四十年目にして、ようやく言えた」と、谷川さんは言った。谷川さんは、高校中途で定時制にかわり、大学には行かなかった。「くやしいか　がっこうよくやしいか」は、谷川さんのなかに息づいていたことばで、ぼくのなかからは生まれないことばだった。ほ

んとにそう思っていた人たちも、このことばを発見できずにいたに違いない。日本の学校教育を鮮やかに批判している。

★

この詩のがっこうをびょういんに、きょうしつをびょうしつに、ほかの単語も病院用語にかえて、もういちど読んでみる。複雑な気持ちがした。「くやしいか　びょういんよ　くやしいか」という最後の行まできて、やはり学校と病院は違うところなのではないかと思った。

病院も、学校に負けないくらい許し難いことごとをかかえている。階級があり権威がある。管理があり服従がある。実験があり過誤があり殺人さえあった。病院が学校より人間的で暖かさを持った建て物だとはけっして言えない。だから、「くやしいか　びょういんよ」ということが十分にありうる建て物だ。

でも何かが違う。

病院は、傷ついた人を相手にしている。人は傷つくということを知っている。傷つき、ときには死に直面している人のまえに立つと、自然に手助けをしないといけないと思える。傷ついた人が医療者をそういう気持ちにさせる。それがケア（care）の始まりで、病院はケアという態度を中心におきたいと思っている。

学校の多くは、傷つかない人を相手にしているし、人は傷ついてはいけない、と思っている。傷ついた人を中心に動いているのか、傷つかない人を中心に動いているのか、その違いが、病院と学校、病室と教室の一番大きな違いなのだろう。

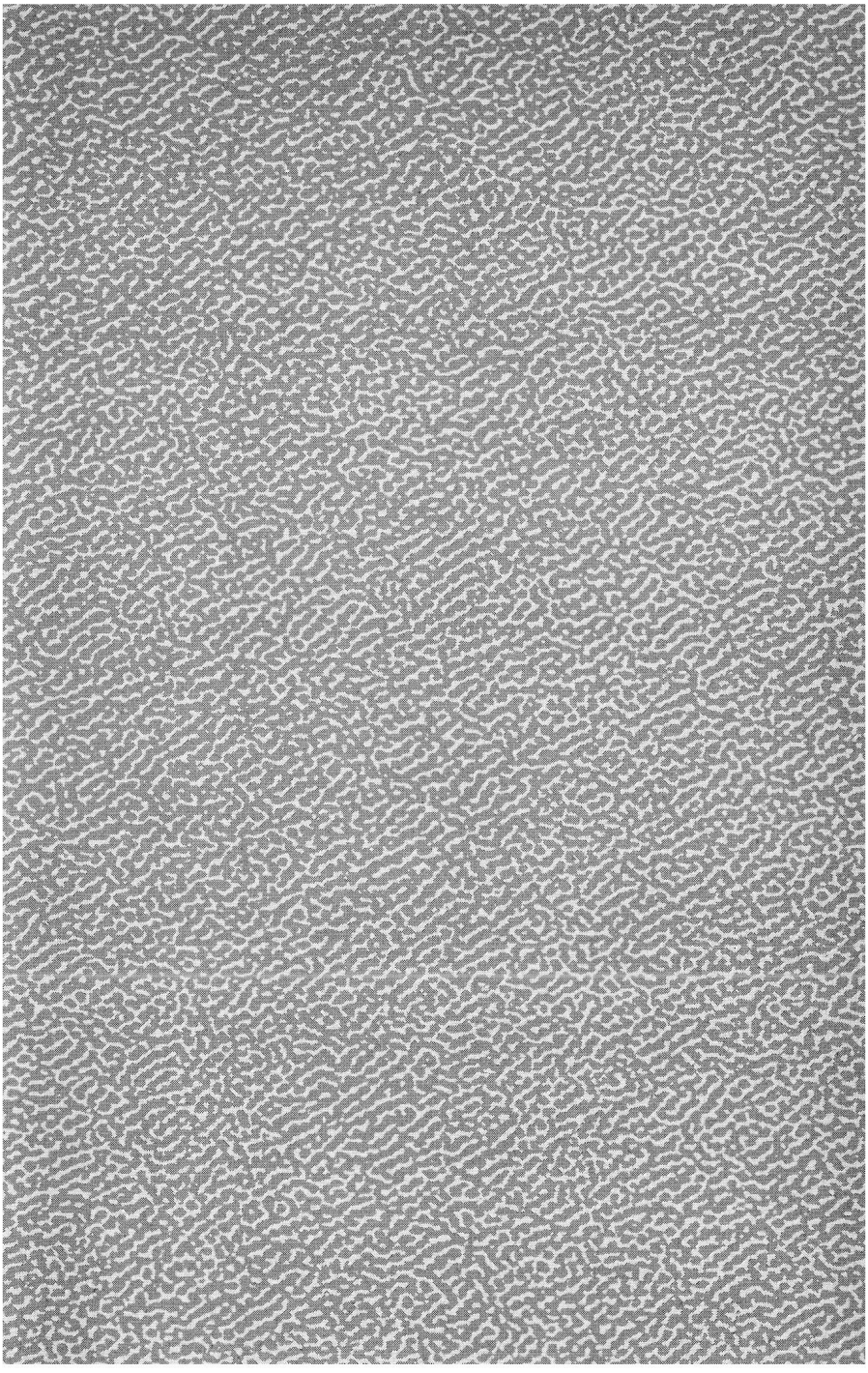
★

生徒をまえにして苦闘している教師もいる。患者をまえにして叱りとばすだけの医療者もいる。学校と病

院、教室と病室がほんとにどう違うのか、簡単には言えない。成長する、あるいは変わっていく人間を相手にしているという点では共通している。そしてそのことで、自分が成長し、変わっていくという点でも共通している。

そんなことを考えながら、病室でのことを綴ってみた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c



I

病室の一日

朝の回診

朝がはじまる

「おはようございます。ただいまから、点滴にまいります。点滴のあるかたは、トイレを済ませてお待ちください」

看護婦さんの声が病棟中にいっせいに流れる。申し送りを終えた看護婦さんたちは詰所からあちこちの病室へ歩いていく。

十月の月曜日の朝、ぼくは回診を始める。北側にある二号室のドアをあける。「おはようございます」。返事はない。脳腫瘍の手術を二年まえに受けたJさんが無表情な顔をして横になっている。「眠れましたか?」。やはり返事はない。今回の入院は腸閉塞のためだった。そちらのほうは落ちついた。でも、自分からはあま

りしゃべらない。そして笑わない。手術のあとだからと説明してもご主人は納得しない。
ご主人は以前、小さな会社の社長だった。ふたりの息子と娘は東京と京都にいて、病気のJさんの世話は付き添い婦さんとご主人のふたりでしている。ご主人はときどき、家で作ったスープや玉子焼きを持ってきては「これ、好物だろ」とJさんに食べさせる。「お前、はやく家に帰ってくれないとゴミの日の朝なんか、たいへんなんだぞ」と語りかけている。Jさんはクリスチャンだ。クリスチャンでない元社長はJさんから昔に聞いた話を思いだしながらこう言う。
「神さまがね、家内はいままでの人生でたくさんの苦労をしたから、もう体を休めなさいとおっしゃってるんでしょ。私には、苦労が足りないから、まだまだ汗をして働きなさい、っておっしゃってるんでしょ」
息子や娘の名前や住所も忘れがちなJさんに、ご主人がそんなこと言ってましたよ、と言うと、Jさんは「先生は奥さんにそんなこと言わせてはいけませんよ」と笑いながら、はっきりと言う。急に正常に活動する脳の働きにこちらが驚く。その二号室には朝によく似合うショパンのピアノ曲がラジオカセットから流れている。
「変わりありませんか」「あっ、おはようございます。ええ、おとといも夕べも不整脈はありませんでした」。ベッドに起きあがり、眼鏡をはずして新聞をたたみながら、二人部屋の三号室のMさんは朝のあいさつをする。二十八日まえに突然の胸痛に襲われて救急室に運ばれてきた。警察官である。立つとジャイアント馬場のように背が高い。経過はいい。無事に立てたし、排便時にも事故は生じなかった。廊下も歩けた。十病日ごろ、心房細動という不整脈が出現したが、薬の内服で落ちついている。「きのうは、階段を一階まで降りて、そして歩いてあがりました」とうれしそうだ。負荷心電図にも異常はなかった。「あさって退院してく

ださい」と言うと、「そりゃ、うれしい。あのときは死ぬかと思いましたもん」と言う。「退院おめでとうございます」と同室の患者さんから言われて、いっそう顔がほころぶ。

「お茶でーす。お茶でーす」と看護助手さんが大きなヤカンを下げて声をかけている。

ヒゲをそる

七号室の個室には七十五歳のMさんがいる。やせた小さなおじいさんだ。肩で呼吸している。三か月まえに肺癌であるということがわかった。「うらあ、家で療養します」と言い、開業医さんに手紙をことづけ、在宅療養をしてもらっていた。Mさんのことも忘れかけていたころ、電話がかかった。

「息苦しそうにします。病院に出たほうがいいと開業医の先生が言います」

そして三日まえの夜、緊急入院となった。

聞きとりにくい掠れた声で、「殺してくれ、もういい、殺してくれ」とじいさんは言った。「えらい、えらい、息苦しい」。脈は毎分百二十以上打ち、顔には冷や汗が出、撮った胸のレントゲン写真には胸水がたくさん溜まっていた。酸素をすってもらい、首の血管から点滴を落とし、胸水の溜まっている左の胸部にチェスト・チューブを挿入して、胸水を排出させた。少しは楽になるのではないかと思ってした治療行為はすべておじいさんの意に反していた。「殺してくれ、殺してくれ」と掠れた小さな声がつづいた。鎮静剤を静注すると眠った。指示を受けて看護婦さんがおなじ注射を二度目にしたあと、じいさんの血圧は下がり、呼吸も弱々しくなった。一昨日のことだった。昇圧剤で回復した。

「もうちょっとで、わたし、じいさんを殺すところでした」と若い看護婦さんがすまなそうに言った。その

看護婦さんが「はい、口あけて」と言い、スプーンで塩酸モルヒネを口のなかにていねいに運び、じいさんは口をあけていた。殺すことにつながらなくても、心のこもった行為は、殺してほしい人にも届くものだな、と感じた。

昨夜は、おばあさんと長男夫婦が泊まってあげたらしい。みんなの顔がくたびれている。紙コップつきのインスタントコーヒーをすすっている。「夕べはちょっと苦しみました」と長男。「なにかして欲しいこと、してあげたいこと、ありませんか」と聞くと、おばあさんが「家を出てから三日、ヒゲもそったらずですけど、そったってええでしょうか」と言う。「いいですよ」と答える。

大きな声で「えらいですか」と聞くと、じいさんは両手を合わせて、「頼みます」と小さい声で言う。「えらかったら注射打ちますから。おばあさん、頼みますね、ヒゲそり」。そう言って部屋を出る。

レントゲン技師がポータブルの撮影機を押しながら病室で写真を撮っている。ビル・クリーナーのおばさんたちが、モップで廊下をふいている。寝たきりの患者さんをストレッチャーでお風呂へ連れていき、体を洗う看護婦さんたちの笑い声が風呂場のほうでする。

七号室の斜めまえの十九号室にTさんがいる。六十五歳である。病識はほとんどなかった。少し息苦しいと思って近所の医者にかかったときには、すでにひどい陰影が肺にあった。そして腹部超音波の検査では、肝臓にもおびただしい転移病巣があった。原発病巣は不明のままだ。急速に悪化してTさんは寝たきりになってしまったが、一週間まえまでは、自分で歩いてトイレへ行けた。夕陽が沈むころになると、西側のベランダに出て手を合わせ一礼した。三歩ほど後ろで、奥さんが手を合わせ一礼した。自分たちの信じる宗教団体のお堂が、病院から見ると西の方角にあるのだった。ねたきりになっても、Tさんの首にはじゅずがかか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c